資料紹介

栗田禎子著　**近代スーダンにおける体制変動と民族形成**　東京　大月書店　2001年　x＋798p.

今年度のアジア経済研究所発展途上国研究奨励賞を受賞した作品。1980年代から営々として積み上げてきた綿密な文献渉猟と，現地での貴重な聴き取り調査をもとに，スーダン近代史を編纂し直したと評しても過言ではない著者渾身の力作，大作である。これだけの作業を独りで成し遂げた研究者としての力量に，まず圧倒された。

しかも，800ページに迫る大部でありながらスムースに読み進むことができる。卓越した文章力と丁寧な注や索引が読者を導いてくれるし，自ら問題を設定しこれに答えていくというスタイルと，通説を批判的に検討しより深い理解を提示していく構成は見事である。

中東研究とアフリカ研究の狭間にあるスーダンは，帝国主義理解やアフリカ近代史にとって欠かすことのできない研究対象だ。スーダンはサブサハラ・アフリカにとって異界ではない。マフディー運動やカラリーの戦いに関する理解なくしてはアフリカの全体像は把握できないのである。その意味で本書の登場は，日本のアフリカ研究にとって望外の喜びである。

書名にあるとおり本書の論点の一つは，スーダンにおける民族形成に置かれている。しかしながら評者の目に映ったその精華は，支配的イデオロギーの虚構性を暴いていくところにある。さまざまな勢力の手にまみれた「民族」という言説が，実は常にある種の虚妄で，スーダン政治における真の問題は民族主義をダイナミックに認識できる思想の欠如にあった，と読めるのである。

スーダンは南アフリカと並んで，アフリカでは最も活動的な共産党を有した国である。本書後半では「革命勢力対反動勢力」というフレームが説得的で，この観点から共産党研究としても興味深く読んだ。

並はずれた仕事にこうして出会うと読み手の心まで充実してくる。研究者であることが嬉しくなってくる。

（平野克己）

澤田昌人編　**アフリカ狩猟採集社会の世界観**　京都　京都精華大学創造研究所　2001年　198p.

アフリカの狩猟採集社会を対象とする貴重な共同研究の成果が出版された。新書形式であり，気軽に手にできるつくりであるが，収録された論文はいずれも高度に専門的である。第１章「バカ・ピグミーの加入儀礼」では，分藤大翼が，バカ語で「ベ」「メ」といわれるものについて，ジェンギという一つの「メ」の加入儀礼に自ら参加し，その全体像と意義に迫る。第２章「森の精に歌いかける人々」では,「ベ」の実施，そして様々な種類の「メ」の具体が示される。筆者都留泰作によるベとメのイラストは，躍動感あふれる素晴らしさで，非常に多くの情報を読者に伝えて印象的である。第３章「グイ／ガナ・ブッシュマンの初潮儀礼」では今村薫が，儀礼の期間から「隔離」の様式，日常生活等での儀礼，禁忌，初潮儀礼の完了までを克明に記し，その意味を考察する。第４章は，編者の澤田昌人による「ムブティ・ピグミーにおける『創造神』問題」である。澤田は本書まえがきにおいて，第１に宗教的な側面の研究の現状と課題を提示すること，第２に「現地の人々の宗教的な体験にできるだけ寄り添い」，「極力先入見を排し」て「できるかぎり精密に正確に」記述する，との２点を本書の目的であるとした。比較的穏やかな筆致で書かれたこの目的の背後に，中部アフリカで長らくムブティ・ピグミーの研究に携わってきた筆者の，先行研究への怒りにも似た強烈な批判が控えていたことが，第４章を読むと分かる。この澤田の論考によって，シェベスタとターンブルという「巨匠」の業績は「創造神ねつ造のプロセス」と位置づけられ，根本的な誤謬が解き明かされることになる。論文集ではあるが，編者の問題意識は共著者全員に行き渡ったようだ。難しいながらも極力現地の人々の体験に寄り添うことで初めて意味ある記述がうまれるのではないか。その難しさゆえに過去の「業績」には深刻な誤謬が見いだされることがあるのではないか。編者の問いかけは，本全体を貫く重いメッセージとなっている。　**（津田みわ）**

遠藤保子著　**舞踊と社会――アフリカの舞踊を事例として**　京都　文理閣　2001年　211p.

本書は，著者が長年取り組んできたアフリカにおける舞踊人類学についての一連の成果である。フィールドワークの対象として，ナイジェリアとエチオピアが取り上げられている。

本書は4部構成になっている。まず「Ⅰ　舞踊と社会」において，舞踊が社会においてどのような意義があるのかを分析している。次に「Ⅱ　舞踊人類学研究の国際動向」では，舞踊人類学という比較的新しい分野について国際動向が概観されている。そして「Ⅲ　アフリカの舞踊人類学」では，ナイジェリアとエチオピアの舞踊に関するフィールドワークの成果が報告されている。そして第Ⅳ章は，まとめと展望である。

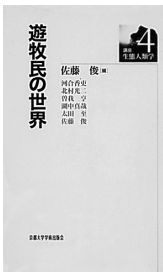
一般には知られていない舞踊人類学という分野を紹介するという意味でも，この本は意義がある。これから舞踊人類学を学ぼうという人には，第Ⅱ章の国際動向の紹介は，よい入り口になるであろう。その一方で，フィールドワークの部分は，舞踊を文字で説明しなければならないため，どうしても隔靴掻痒の感がある。全く知識のない国の舞踊を，写真があるとはいえ文章から理解することはひじょうに困難である。また，たとえばエチオピアの舞踊の変容の歴史など，興味深い題材が多く取り上げられているのにもかかわらず，舞踊自体を説明するために紙数を費やすことで分析部分が手薄になってしまっているのが残念である。

しかし，本書は，舞踊人類学の可能性についての展望を広く示してくれている。この本を手に取ることで，アフリカの文化・社会を理解するための新たな視角が加わることになろう。

なお，第Ⅲ章の最後の部分における「フィールドワークによる調査成果の公表・還元」の項目にあるエチオピアと日本両国における日・エ舞踊団の共同公演の紹介は，研究・分析からは離れて，一種の体験記として興味深い。

（児玉由佳）

佐藤　俊編　**遊牧民の世界**（講座生態人類学４）　京都大学学術出版会　2002年　vii＋330p.



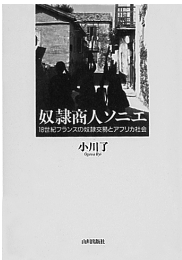
本書は東アフリカの牧畜民社会に関する六つの論考を集めたものである。各論考のテーマと対象社会および著者を列挙すると，ドドスの認識論（河合香吏），トゥルカナにおける「生存の技法」（北村光二），ガブラと近代国家（曽我亨），サンブルと市場経済（湖中真哉），トゥルカナの家畜交換（太田至），レンディーレにおける「ねだり」（佐藤俊），となっている。取り上げられているテーマは実に幅広く，またいずれも現代に生きる牧畜民の特徴に注目しているところが共通している。「生態人類学」のシリーズの一巻として刊行されてはいるものの，伝統的な生態人類学の関心を超えた意欲的な論考が多い。

現代アフリカの政治や経済に興味を持つ読者には，曽我論文と湖中論文が面白い。曽我論文は，ケニアの辺境に位置するガブラ社会が，国会議員選挙の実施を通じてどのような変化を経験したかを分析している。他方湖中論文では，サンブルの家畜取引が首都ナイロビを中心とする市場経済に統合されていく過程での，家畜商の役割に注目している。いずれの論考も，「国家や市場経済に呑み込まれる伝統社会」というような一面的な見方では捉えきれない，牧畜民社会と外部世界との間の複雑な相互関係を明らかにしている。

本書の執筆陣はいずれも長期のフィールドワークに従事した経験を持ち，また同一社会を長く継続して調査している人類学者である。それだけにどの論考の内容も具体例に富み，説得的である。また編者による短いが的を得た序章も，専門外の読者が牧畜民研究の現状を理解するのに役立つ。人類学者や牧畜民研究者だけでなく，アフリカの多様な現況に興味を持つ多くの人に手にとってもらいたい一冊である。

（高根　務）

小川　了著　**奴隷商人ソニエ ――18世紀フランスの奴隷交易とアフリカ社会**　東京　山川出版社　2002年　340＋13p.



本書は，ソニエという名のフランス人奴隷商人が残した記録を中心とする，奴隷貿易そして当時の西アフリカ社会の研究である。ソニエが残した18世紀の記録の翻訳・注解はきわめて貴重なものだが，加えて奴隷制をめぐるフランスの議論や当時のアフリカ社会の状況，さらに大西洋航路の実態なども論じられ，ソニエの記録を多面的に理解するための工夫が凝らされている。本書を読了した者は，今日ダカールで暮らす人々が，いかに深遠な歴史を背負っているのかを知ることになる。

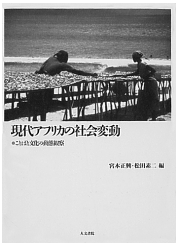
著者の小川氏は，人類学の立場から長年セネガルに関わってこられた。前作の『可能性としての国家誌：現代アフリカ国家の人と宗教』と比べると，本書のアプローチは一見かなり異なる。しかし，二つの著作からはいずれも，セネガルあるいは西アフリカの人と社会を理解したいという著者の想いが伝わってくる。その意味で本書は，前作の延長線上にあるのだと思う。

アフリカ研究を志す者にとって，奴隷貿易は避けて通れないテーマである。近代世界システム形成の機動力であった奴隷貿易は，アフリカ社会を著しく傷つけ，政治，経済，社会，文化面のさまざまな変容をもたらした。今日に至るまで奴隷貿易時代の記憶を語り，その文化的痕跡を残す社会もアフリカには見られる。

池本幸三他『近代世界と奴隷制』（1995年）をはじめ，近年日本でも奴隷制に関する良質の研究が出版されるようになった。奴隷貿易に関する研究はまだ少ないが，藤井真理氏の『フランス・インド会社と黒人奴隷貿易』（2001年）に続き本書が出たことで，その厚みを徐々に増しつつある。最近では，奴隷貿易のデータベースが市販されるなど（David Eltis et al., *The Trans-Atlantic Slave Trade: A Database on CD-ROM,* Cambridge University Press），研究のフロンティアはなお広がっている。本書は，藤井氏の著作とともに，この分野の先駆的な必読文献となるだろう。

（武内進一）

宮本正興・松田素二編　**現代アフリカの社会変動 ――ことばと文化の動態観察**　人文書院　2002年　441p.



宮本・松田編の分厚い本がまた出版された。１冊目の『新書アフリカ史』（講談社現代新書）と同様，本書も多彩な執筆陣をそろえて実に内容豊かである。441ページにもおよぶ本書には，言語，文学，民主化，開発政策，農業などさまざまな視点から19の論考が集められている。加えて２人の編者によるスパイスの利いた小論が，プロローグ，エピローグとして収められている。

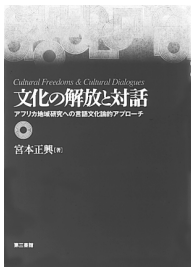
このような多種多様な執筆内容に共通するテーマは，現代アフリカの「危機」と呼ばれている現象をミクロな生活世界から見直すこと，そしてその過程で植民地支配の遺制に十分な注意を払うことである（「プロローグ」）。この問題意識を執筆者が共有することにより，多彩な内容の論考それぞれに通底する軸が保たれている。

本書は４部構成となっており，「国家原理と言語社会の編成」「ことばから社会へ－生態学的考察」「開発と環境の現在」「歴史と表象の問いかけるもの」という区分けのもとに各論考が配置されている。しかしこのような構成にとらわれずに，気のおもむくままランダムに論考を選んで読んでいくのもいいだろう。マリ農村の学校建設の話の次にはマラウイ湖の魚に思いをはせ，ムブティ・ビグミーの世界観について学んだ後でタンザニアの言語状況を知る，といったような脈絡のない読み方が意外に楽しい。

各執筆者が持っている独特の個性や，アフリカに対するそれぞれの思い入れが，各論考に色濃く反映されている点も本書の魅力である。その個性と思い入れに対して，時には共感し時には首をかしげながら，各執筆者と「対話」する楽しみを本書は与えてくれる。

（高根　務）

宮本正興著　**文化の解放と対話――アフリカ地域研究への言語文化論的アプローチ**　東京　第三書館　2002年　560p.



1990年代以降に発表された著者の膨大な数（全部で77にも及ぶ）のアフリカ文学・言語についての論考やエッセイ，書評を編纂したのが本書である。一つ一つは短く，また完結しているので，どこからでも読み進めることができる。

本書は,「第一章　文学の射程－もう一つのアフリカ現代史」,「第二章　書評とエッセイ」,「第三章　ことばと社会の動態」,「第四章　地域研究と歴史記述」の４部構成となっている。

第一章では，アフリカ文学とその作家たちを中心に据えて，アフリカ社会の持つさまざまな矛盾や相克を分析している。第二章では，アフリカ文学や地域研究関連の本に関する評論や，アフリカでの筆者の個人的な出会いをもとにしたエッセイが並べられている。そして第三章では，アフリカ社会における言語の持つ意味，影響について考察を深めている。植民地化の歴史や言語的・民族的多様性がもたらす問題が，ここでは多くの資料・データとともに提示されている。最後の第四章では，アフリカにおける地域研究の意義を語る論考と，アフリカ史に関する論文である。

筆者の近年の精力的な活動を網羅している分，一冊の著作としてみると茫漠とした印象を受ける。しかし，読み進めていくうちに，アフリカ文学そしてアフリカの言語を取り巻く状況がさまざまな角度から照射され，全体像とともに浮かび上がってくる。緻密に構成された一つの論文よりも，あまりにも複雑で矛盾をはらんだ現代アフリカの文学そして社会の状況を提示するためには，このようなアプローチは効果的であるといえよう。

（児玉由佳）

平野克己著　**図説アフリカ経済**　東京　日本評論社　2002年　vi＋185p.

アフリカ経済に関する格好の入門書であると同時に，新しい視点を提示した専門書でもある。アフリカに関連する邦語専門書のほとんどは各国論であるが，著者はあえて「サブサハラ・アフリカ」という枠組みにこだわり，国際比較とアフリカ内比較を通じてアフリカ経済全体を掴もうとする姿勢が貫かれている。この姿勢は,「アフリカ経済が成長しない謎を解き明かし，……経済成長をもたらしうる処方箋に至りたい」（p.166）という著者の強い願いを反映したものと思われるが，同様の意識を持つ多くのアフリカ関係者や初学者にとって，「アフリカ」の持つ問題を明らかにしてくれる有益な書となるであろう。

本書では豊富な図表を利用して，アフリカの農業，製造業，貿易，および経済大国としての南アフリカ経済の現状について，特徴と問題点が明快に説明されている。他方で，独立後からの開発思想や経済政策に関する歴史的な記述も豊富に盛り込まれており，初学者はバランスの取れた知識を得ることができるであろう。また，今ひとつの特徴として，国際比較が可能な図表が膨大に用意されており，資料集としてもたいへん有用であることが挙げられよう。

さらに本書では，農業および製造業の生産性の低さについて，著者独自の分析が展開されている。南アを含めたアフリカ諸国では産業構造の偏りが顕著であり，そのため工業が経済成長のエンジンとなっていないことを示した論考は，説得的である。残念であるのは，国際的な開発経済学界におけるアフリカ経済の見方との関連が示されていないため，著者の主張の位置づけが分かりにくいことである。しかし，入門書として限られた紙幅の中で十分なレンジの論点が含まれており，初学者から専門家，実務家まで幅広く推薦したい。

（福西隆弘）